

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	馬場 裕子 (ばば ひろこ)
○学位の種類	博士 (学術)
○授与番号	甲 第 1114 号
○授与年月日	2016 年 3 月 31 日
○学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項 学位規則第 4 条第 1 項
○学位論文の題名	神戸中華同文学校の多文化・多言語教育 —学校コミュニティの維持・創造をめぐって—
○審査委員	(主査) 小川 さやか (立命館大学大学院先端総合学術研究科准教授) 西 成彦 (立命館大学大学院先端総合学術研究科教授) 松原 洋子 (立命館大学大学院先端総合学術研究科教授) 渋谷 真樹 (奈良教育大学教育学部教授)

<論文の内容の要旨>

本論文は、神戸中華同文学校（以下、神戸同文）を主対象とし、横浜山手中華学校（以下、横浜山手）を比較対象として、中華学校の教育・経営にかかわる実践を、一つの共同体としての時代状況への独自の適応戦略として考察したものである。

序章では、まず中華学校に子どもを通わせる日本人保護者の増加を受けて、中華学校が大きく変容しつつあることが記述される。次に中華学校を対象とする先行研究が(1)中華学校の歴史と学校を支える華僑コミュニティに関する研究、(2)多言語教育と教育カリキュラムの比較研究、(3)多文化教育、多文化共生、外国人学校の社会学の3つの研究群に整理される。それら多岐に渡る研究では、中華学校の文化や理念・実践にかかわる何らかの「維持・継承」と「変容・革新」が扱われていること、本論文ではこの二つの同時実現を「ハイブリッド性」と文化人類学におけるコミュニティ論を手掛かりに論じることが述べられる。

第1章「神戸中華同文学校の歴史と華僑社会の成り立ち」では、神戸同文と横浜山手の開校までの経緯と115年間の学校史が概観される。第2章「中華学校を取り巻く華僑社会」では学校を取り巻く華僑社会の構成と学校内の保護者集団の関係性が明らかにされる。ここでは、保護者同士／保護者と学校との関係を背景として、学校を支える華僑コミュニティのフリンジに位置する者たちが、寄付や行事への貢献などを通してコミュニティの中心的な担い手となろうとする過程で、学校コミュニティが創出されることが論じられる。

第3章「神戸中華同文学校の経営・教育理念と国際化」では、一条校問題や民族教育の継承をめぐる経営者らの理解と対応、神戸同文の教育理念「刻苦奮闘」に対する保護者らの語りと出来事が考察される。刻苦奮闘の内実である厳しい躰や規律正しさに対する保護者らの定型化された賛美の語りは、経営者らの外部に向けた統一的な説明とも共通する。ここから「文化」の規定・内実を変化させることなく、その解釈・コンセプトを時代状況に応じて巧みに変化させることで、学校コミュニティ内部に取り込むメンバーシップを拡大させるという共同体としての中華学校独自の戦略が指摘される。

第4章「神戸中華同文学校の多言語教育」では、神戸中華同文学校における中国語・日本語・英語の三言語教育の維持にかかわるカリキュラム上の工夫や、二言語併用の変則的イマージョン教育、一斉授業、暗記型の宿題、居残り授業の実態が明らかにされる。またこれらの教育方法・内容に対する評価は保護者の間で違いがあること、しかしそうした差異は、学校コミュニティの中心である卒業生たちが、学習効果よりも人間関係の豊かさや刻苦奮闘の価値を前面に押し出すため、表面化しないことが示唆される。

第5章「神戸中華同文学校における多文化創生」では、中国語と日本語とが一つの会話に交じる「同文語」とそれを基にした「同文語族」という学縁コミュニティ、学校行事における文化的なハイブリッド性、国際理解教育の内実が検討される。同校の教育はいっけん属性に基づく人間理解の回路を否定し、同文語族という新たな「民族」に人々を包摂するものにみえるが、実際には「実利主義的」に立場や役割、場面や状況に応じて、言語や文化をその組み合わせのバリエーションとともに繰り出せる人間が育成されていくことが述べられる。

バリエーションとともに繰り出せる人間が育成されていくことが述べられる。

終章では以上を総括し、ある種の変わらなさが各時代の需要に応じた形の「良さ」として再発見・喧伝され、外部者を巧みに組み込みながら、共同体としての中華学校が維持・再生産されていくプロセス・「しかけ」が提示される。これを踏まえて刻苦奮闘や同文語、ハイブリッド文化を神戸同文／華僑の伝統や文化に還元するのではなく、多層的な人々の関わり合いから「神戸同文らしさ／華僑らしさ」として了解されていく事態を丁寧に解きほぐすことが、多国籍化・多元化しつつある中華学校の根幹を炙り出す上で重要であることが主張される。

<論文審査の結果の要旨>

本論文は、神戸中華同文学校の学校史、それを支えてきた華僑コミュニティ、学校にかかわることで創出されるコミュニティ、多言語教育・多文化教育の実践、独自の多言語・多文化教育の結果である「同文語」・ハイブリッド文化とそれを基にした国際理解教育といった様々なテーマを扱っている。個別のテーマ自体は先行研究があり、やや掘り下げが足りない点もあるものの、本論文はこれらの多様なテーマを一つの共同体／コミュニティと

しての一貫した戦略に位置づけて接合した点で、これまでの研究にはないユニークな論文である。

審査委員からは、中華学校を支えてきた中心的なコミュニティが老華僑であることに留意して、新華僑の夫との間に生まれた娘を同校に通わせながら、コミュニティの正統的なメンバーとなることに苦悩した日本人保護者としての立場性を明確に打ち出したことで、学校コミュニティ内部の集団の多層性や関係性、保護者集団の意見や日常的な関わり方の違い等が明らかにされたことが高く評価された。また、そのような多層性や差異が、神戸同文学校の教育理念「刻苦奮闘」やハイブリッド文化において「解消」され、中華学校の教育理念や実践、コミュニティの維持・再生産に組み込まれていく過程を、文化人類学の共同体論「開かれていながら閉じている共同体」「内実を変容させずに変異を遂げる共同体」一によって整合的に説明されたことも高く評価された。さらにオートエスノグラフィの手法を用いて自己を客体化し、研究者自身もそうした共同体としての中華学校の戦略の一環に組み込まれていることを示唆したこと、そこから中華学校の実践を論じる際の独自の視座を導き出した点も重要な達成である。

他方で、審査委員からは老華僑、新華僑、日本人といった中華学校にかかわる人々の属性にかかわる定義の曖昧さや、日本の公立学校で問われているコミュニティスクールやスクールコミュニティとの概念的な違いに関する説明の不足、および日本の公立学校への示唆を課題に残した点への疑義などの問題点についても指摘された。これに対して申請者からは、定義や概念の曖昧さはすぐに対応可能であること、公立学校との拙速な比較に問題があることは十分に認識しており、当面は共同体としての中華学校の独自性を掘り下げることを第一の課題としていると返答された。

以上を勘案した上で、審査委員は一致して本論文が博士論文としての水準に十分に達していると判断した。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の審査にあたっては、2016年6月17日（金）14:00～15:30、創思館302において口頭試問、2016年7月19日（火）14:30～15:30、平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルームにおいて公聴会を実施した。口頭試問での審査委員からの指摘に対しては、公聴会において十分な対応がなされたことが確認された。また公聴会での質疑応答も適切なものであった。

申請者は、本学学位規程第18条第1項該当者である。先端総合学術研究科は、査読付き学術雑誌掲載論文相当の公刊された論文を3本以上もつことを学位請求論文の受理条件としている。受理審査委員会の審査により、本論文はその条件を満たすことが確認された。本論文の学術的な価値に関しては、公聴会での報告および質疑応答において十分な評価に値するものと判断された。以上より、本審査委員会は、本学位申請者に対し、本学学位規程第18条第1項により、「博士（学術 立命館大学）」の学位を授与することが適当と判断

する。